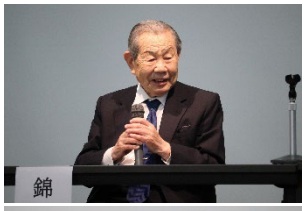
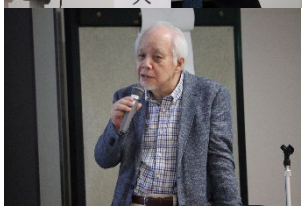
支部のトピックス（近畿支部）

高度経済成長期の関西の社会資本整備を語る





令和６年５月、近畿支部は高度経済成長期の社会資本整備に携わった技術者の経験を次世代に伝えることを目的に「関西の社会資本整備を辿る講演会～御坊火力発電所の建設（外洋に人工島方式の発電所を築く）～」を大阪科学技術センターで開催しました。

関西電力が和歌山県御坊市沖に建設した御坊火力発電所（人工島方式）の建設事業に焦点を当て、約 250 人が会場で、約 500 人がオンラインで聴講しました。

山林佳弘支部長（当時）は、開会挨拶において「日本初となる人工島での火力発電所であり、当時の電力需要増に対応するため計画、建設され運転開始から 40 年経過した。技術的に先導的な役割を果たした地域プロジェクトの経験を聴講できるのは有意義。講演会が過去と未来の懸け橋となることを願う」と、若手技術者への継承を目指す講演会の意義を話しました。

講演では、関西電力の御坊火力発電所の建設所長（当時）であった錦織達郎氏が計画の経緯と意義を説明。近畿南部での電源開発の必要性や発電所の概要、台風被害を最小限に抑え工期を短縮できた背景には関係者と施工者の協力があったと述べ、土木学会技術賞の受賞があったことを紹介しました。

当時新入社員として設計に携わった大石富彦氏は、漁業や環境への影響を考慮した人工島建設の難しさを語り、工事を通して土木技術の基礎を学んだと回顧。錦織氏から指導された工事誌の重要性を強調し、「記録が技術継承やメンテナンスに役立つ」と述べました。

埋め立て工事を担当した澤畑誠氏は、稼働日数の確保に苦心した点を、木越正司氏は連続土工システムによる工期短縮を説明しました。西川真次氏は、軟弱地盤での連続地中壁施工における地盤改良と独自技術「OWS 工法」の活用について解説しました。

最後に、京都大学の松島格也特定教授をコーディネーターにパネルディスカッションを行い、講演で得られた学びを将来に活かすことの重要性が述べられました。

日本初の人工島での火力発電所建設という大規模プロジェクトにおける技術者たちの経験を共有できたことは、インフラ整備に携わる現役の技術者にとって重要な示唆を与えてくれた貴重な機会となりました。